

遊天瀧記 (一)

勉強会令和四年一月十五日(担当 金男、弘之、俊雄)

嘉永改元夏四月七日、余拉友人及門生數輩、將以探天瀧之勝、是日到夏梅村、宿鎌田氏、

八日雨甚、至晚晴、是夜宿市場村田村氏、

九日天氣開朗、乃以市場夏梅村人、為鄉導、入筏村山中、或步澗底、或攀山腹、歷四五里、遂至天瀧、

瀧奔湍也、邦俗稱飛泉、總為瀧、則天瀧之為言、蓋謂飛泉自雲間而

落也、余仰首、則斷崖千尺之上、翠微遙靄之間、噴沫激注、如萬斛碎珠、如百丈乱絲、日光映射、風声震盪、

読み

嘉永改元夏四月七日、余友人及び門生數人を拉れて、將に天瀧の勝を探ねんとす。是の日、夏梅村に到り、鎌田氏に宿す。

八日、雨甚しく、晩に至つて晴。是の夜、市場村田村氏に宿す。

九日、天氣快晴。乃ち市場夏梅の村人を以て、鄉導と為し、筏村山中に入る。或いは澗底を歩き、或いは山腹を攀り、四五里を歴て、遂に天瀧に至る。

瀧奔湍也。邦俗飛泉を稱して總て瀧と為す。則ち天瀧と之を言う為り。

蓋し飛泉雲間自り落ちるを謂う也、余首を仰ぎて、則ち断崖千尺の上、翠微遙靄の間、噴沫激注、萬斛碎珠の如く、百丈乱絲の如く、日光映射、風声震盪す、

訳

嘉永改元の夏四月七日、私は友人や塾生數人を引き連れて、名勝天瀧に入ろうとした。この日、夏梅村に來た。鎌田氏宅に泊まった。

八日、雨激しく降り、晩になつて、晴。是夜は、市場村田村氏に泊まった。

九日、天気開朗、すぐに市場や夏梅の村人を道案内人として筏村いわたの山中に入った。或いは谷底を歩き、或いは山腹を攀よじりながら、四、五里ほどで、ついに天瀧に着いた。

瀧は、勢いが強く水の流れが速い。一般的には、高いところから勢いよく落ちる水を「瀧」と言うので、この瀧は、「天瀧」と呼ばれている。恐らく、水が勢いよく雲間から落ちてくるような様子を見て、そう名付けたのであろう。私が仰ぎ見れば、断崖は千尺ほども高く、薄緑の霞んでい間から、噴き出す泡が激しく注ぐ様子は、萬斛ばんこくさいじゆ碎珠さいしゆのようであり、百丈乱絲のようであり、日光は水珠を照り輝かせ、風の音は激しく地を揺れ動かし

ている。

註・言葉

嘉永改元Ⅱ戊申 弘化五嘉永元年、一八四八年。草庵35歳 八月には、國屋松軒の妹（久子）と結婚。一年前の六月青谿書院建つ。

開朗Ⅱカイロウ 開けっぱなしで明るい 澗底Ⅱカンテイ 谷底

奔湍Ⅱ川の水流の急な所。早瀬。翠微Ⅱもやがたちこめている青々とした山。

靄Ⅱアイ もや 萬斛Ⅱバンコク 非常に量が多いこと

碎珠Ⅱこまく砕けた珠 震盪Ⅱシントウ ふるえ動く